

方言の公認記録

— 研究者への提案 —

榎 垣 実

スポーツの方では公認記録制度というものがあって、一定の条件が具備していないと、どんなによい記録でも公認されないことになっている。事情はだいぶ違うけれども、方言研究にも、資料の発表にこの種の公認制度を設けたならば、どれほどこの研究分野の進歩発展に寄与するところが多いだろうか。こんどのこの方言研究特輯号を機会に、それを提案したいと思う。研究家各位の御賛同を得ることができればまことに仕合せである。

方言研究は、国語学の他の分野とちがって、文献資料の利用は極めて限られていて、厳密な科学的研究をしようと思えば、各地を歩き廻って資料を自分で集めるより方法がないことが多い。しかし、ひとりで全国を歩き廻ることは容易なことではないし、考えてみれば実に無駄な骨折りである。現在は全国に国立国語研究所の委託調査員もあることだし、それ以外の方言研究家も多いのだから、お互に資料を交換し合い、利用し合わないというのは、大きな無駄であり、時間と労力の浪費である。

ところが、実際の研究に際しては、今まで発表された資料のうち、安心して利用できるものはまことに数えるほどしかないのである。貴重な資料であっても、語彙的にしか利用できず、音韻的

には全く価値がなかったり、文法的考慮が全然払われていなかったりして、みすみす利用を断念しなければならぬことが多いのである。東条先生の『全国方言辞典』や『分類方言辞典』にしても、編纂の時利用された資料が、公認される程度のものばかりだったとすれば、あの辞典から受ける恩恵は現在に数倍しただろうと思われる。そう考えるにつけても、資料の発表にだいたいの基準を設けて、他の研究者が十分利用できるようにすることが、目下の急務ではないかと考えるのである。おそらく発表者も、他の研究者が大いに利用することをこそ願っているのだから、その点に異存のあろう筈はないと思う。

方言の公認記録などといっても、別に規定を設ける必要はあるまい。研究者各自が信頼できる資料を提供しようと思えば、それで問題は解決するのである。とにかく自分の力量に応じて最善の努力をし、それでも信頼性が薄いというのならば、それはやむを得ないので、要するに問題は発表に当っての心構えと努力にあるのだといえよう。

「他の研究者が利用できる資料」ということが第一条件だとすると、「どんなに利用するだろうか」を考えることが、資料提供者

の礼儀ではなからうか。今までの資料の不備はほとんどすべてこの点の配慮の不足から起っている。言語は話されるものだから、たとえ不完全な形においても、再現できるように発表するのが当然である。いわば言語の「生態」を伝えることを第一義とすべきであろう。方言は便宜上、音韻・文法・語彙の三面に分けて研究されるけれども、その三面が互にからみ合って言語体系を造り上げていることは、今さらいうまでもない。観察する場合にはどの角度から眺めても問題ではないが、それは決して「生態」ではない。資料は「生態」として提供し、観察は利用者の思い通りに任せるという態度が、一番大切なのではないかと思う。

たとえば、資料は「文」の形で示すべきである。「ばかり」をパーという現象は、文献によれば中国地方にも四国地方にもあることになっているが、中国では「兩パー降る」と使い、四国では「一時間パー待った」と使って、意義・用法は違う。語彙を取扱うにも、「文」の形で扱うことが必要である。そうしないと誤解が起ったり、時には全く理解できないこともあるからだ。

次にアクセント符号を是非ともつけてほしい。『全国方言辞典』にそれがついていないのは最も残念なことである。おそらくあれを利用する人達は、東京人ならば東京式アクセントで読み、私ら上方の者は京阪式で読み、それぞれそれが「実態」だと思つて、何くわぬ顔をしているのだ。日本人なら誰でも故郷の方言アクセントでごまかせるが、グローターズさんは全然読みようがないといつておられた。「発音できない言葉」を発表して、それが大手を振つて通用するなどは、全く笑いごとではない。一流の専門家

にも、アクセントの聞き誤りはあるし、誤記・誤植は更に多いが正確に伝えようという心構えと努力だけは各人に期待したい。

音韻については問題が多いが、カタカナでも注意して使えばかなり正確な記述ができるのだから、少くとも表記法の研究と工夫を怠つてはなるまい。特殊な音については、語例をできるだけ多く示すことが第一だ。音そのものについては専門家に相談すべきで、独り合点は絶対に禁物である。手軽に使えるようになった録音機を利用すれば、一流学者に相談することは訳もない。音声記号の使用も、利用者の便利を考へてのことであつてほしい。

使用地域(少くともその実例の使われた土地)・使用者(年令・性別・階層などによる使用差のある時はそれも)・使用頻度・待遇意識などの相違や制限などについても、必要にして十分な註記をほどこしてほしい。方言では時として珍らしい語を多く並べたてようとして、特定の人しか使わないものを、あたかも一般に使われるような示し方をすることがある。いつも利用者の立場に立つて親切に註記すべきである。特に幾つかの語形が並び行われる時、どれが基本形、どれが変形、使用者や使用頻度がどう違ふかは、是非とも註記すべきであろう。

思いつくままに数えたのだから、まだまだ条件はあるが、要するに利用者への思いやりが第一なのである。恵まれない環境の中で、人知れぬ苦勞をして研究している地方の学者が、お互の辛苦の結果を利用し合えないで、お互に振出しから始めているなどこの学問の進歩のため、いかに愚かなことかを、よくよく考えるべきではなからうか。